



かがやく浜の子

令和2年度 10月号

令和2年度重点目標 「チャレンジいっぱい かがやきいっぱい」

相手がうれしいと自分もうれしい

10月29日、白羽小学校に、「劇団たんぽぽ」をお招きして、演劇鑑賞教室を開きました。劇団たんぽぽの創立主催者は、俳優の小百合葉子（さゆりようこ 1901～1986）さんで、戦後間もない1946年に長野県で発足されています。1953年に小百合さんのふるさと、静岡県浜松市に活動の拠点を移し、2016年には劇団創立70周年を迎え、北は北海道から南は沖縄まで、43,000回もの講演を積み重ねています。保護者・地域の皆案の中にも、小・中学校の時代に、劇団たんぽぽの劇を鑑賞した方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。私も観劇した記憶があり、教員になってからも十数回以上、その機会に恵まれてきました。劇団たんぽぽの劇には、「勇気」「命」「友情」・・・など、子供たちに伝えたいメッセージが含まれており、毎回「子供たちに感じてもらいたいとは何か。」を考えながら鑑賞し、鑑賞後の学級活動で子どもたちと感想を分かち合ってきたものです。

今回、上演されたのは佐野洋子さんの絵本が原作となる「100万回生きたねこ」でした。

いくつもの時代を生まれ変わりながら、様々な人間に飼われるねこがいました。飼い主から可愛がられても、ねこは人間が大嫌い。人間たちはねこが死んだときに泣きますが、ねこは一度も泣きませんでした。ある時、ねこは野良猫に生まれ変わり、一匹の白猫に出会います。生まれて初めて愛おしいという感情を持ったねこは、白猫と結婚し、子供も生まれ幸せな家庭を持ちます。歳月が経て、白猫と死別するねこは、初めて大泣きし、二度と生まれ変わることはありませんでした。



というあらすじでした。「愛することの素晴らしさ」「家族の温かさ」「一度しかない人生を一生懸命に生きること」などを、感じることができました。

そんな劇を演じてくださった「劇団たんぽぽ」ですが、コロナウイルスの関係で公演依頼が激減してしまいました。アルバイトをしたりクラウドファンディングを行ったりして、劇団存続への努力をされていることは、ニュースでも報じられました。実は、白羽小学校での公演も、感染拡大防止の観点からキャンセルをお願いすることを考えました。劇団の方と交渉する中で、公演料はそのまま、2回に分けての分散上演を快く引き受けてくださいました。当日も、舞台と客席との間隔を空け、間にはアクリル板を設置するなど、安全対策を講じた上で演じてくださいましたので、安心して鑑賞することができました。



募金箱をわたす児童

2回公演のお礼と、励ましの意味を込めて、運営委員会の子どもたちが中心となって、劇団たんぽぽへの募金活動が始まりました。短期間での活動でしたので、金額的にはそれほど大きいものではなかったのですが、集めた募金箱を代表児童がお渡ししたときには、5人の劇団員の皆さん全員が、目を潤ませ鼻を赤くし、白羽小からの心遣いを受け取ってくださいました。後刻には、「劇団員が感激のあまり、泣きながら劇団に戻ってきました。」というお礼の電話も代表の方からいただきました。白羽小の子どもたちも職員も、心遣いの行動が、相手に喜んでもらえ自分もうれしくなることを、あらためて感じる事ができた出来事になりました。（文責 校長）



劇団からのお礼の色紙